

Transcription of the Gonza Materials

KOMABASHIRI Shoji

Abstract

To date, it has been thought that all materials attributed to the Japanese castaway Gonza were written by Gonza himself. However, there are many details that cannot be explained under this interpretation. In this paper, I examine the vocabulary employed in the *Brief Report*, a text composed in the same hand as the *New Slavic-Japanese Dictionary*, and determine that it reflects a higher proficiency level than that found in other Gonza materials. I further analyze the handwriting of all the Gonza texts, concluding first that at least three persons served to transcribe the materials, and second that no clear differentiation of transcription roles applied to these three persons.

After considering these and various other inconsistencies, I have determined that the Gonza materials were not in fact transcribed by Gonza himself. Further, I conclude that Russians other than Andrej Bogdanov served to transcribe the materials.

ゴンザ資料の筆録者

駒 走 昭 二

1. はじめに

漂流民ゴンザがロシアで作成した日露対訳資料のことを本稿ではゴンザ資料と呼ぶことにする。具体的には次の6点が存在する。

1. 『Вокабулы』（以下、日本での通称に従って『露日単語集』とする）
2. 『Преддверие Разговоров Японского Языка』（以下『日本語会話入門』とする）
3. 『Новый Лексикон Славено Японский』（以下『新スラヴ日本語辞典』とする）
4. 『Краткая Грамматичка』（以下『簡略日本文法とする』）
5. 『Дружеские Некоторые Разговоры Образцы』（以下『友好会話手本集』とする）
6. 『Orbis Sensualium Pictus』（以下『世界図絵』とする）

これらのうち、『露日単語集』『日本語会話入門』は一冊に合綴されている。また、この両書と『友好会話手本集』には、草稿本、清書本の2種が存在する。

本資料は、当初、科学アカデミーの司書補アンドレイ・ボグダーノフに

よって書かれたものと考えられていた¹⁾。その存在を日本国内で初めて紹介した八杉貞利（1909）も、ボグダーノフの「筆に疑ひなく」としている。しかしバルトリド（1911）で「（ゴンザが）ボグダーノフの指導の下に編纂した」との見解が示され、さらに、ベルグ（1924）やドストエフスキー（1930）でゴンザの著作、筆録ということが明記されてから²⁾は、ゴンザがボグダーノフの協力を得て筆録したという見方が一般的となった³⁾。現に、『簡略日本文法』原本の巻頭頁には、「писана японцом под назираниєм и учениєм рускаго языка Андрея богданова 1738（アンドレイ・ボグダーノフのロシア語教育と監督の下、1738年、日本人によって書かれた）」との識語があり、『露日単語集』『日本語会話入門』の合綴本（清書本）にも同様の記述が見られる⁴⁾。ここで言う「日本人」とは、当時のサンクトペテルブルグの状況から判断してゴンザ以外には考えられない⁵⁾。つまり、これらの識語は、本資料の筆録者がゴンザであることを決定的に示していると言えよう。

しかし、そうだとすると後述するような不可解な点が存在することになり、また、同じゴンザ資料であっても『新スラヴ日本語辞典』の識語では、日本人のことは一切触れず、「сего языка содерцатель школы японскаго языка Андреи богдановъ（この言語 日本語学校の管理者アンドレイ・ボグダーノフ）」としか記されていないことの説明が必要になる。『簡略日本文法』、『露日単語集』、『日本語会話入門』と『新スラヴ日本語辞典』の本文は同じ筆跡で記されているにも関わらず、識語の意味する筆録者が異なるのはどういうことか。このような疑問の余地が残されている以上、筆録者は誰かという本資料に関する極めて基本的なこの問題は、解明されていると言いがたい。本稿は、ゴンザ資料の原本の筆跡や語彙の特徴の考察を通じて、本資料の筆録者を再検証しようとするものである。

2. 二つの筆録者案

筆録者がゴンザであることに初めて疑義を呈したのは田尻英三（1981）であろう。ロシア語の見出し語と日本語訳とが意味的に対応していないいくつかの例に注目し、「辞書や文法書の完成にはかなりボグダーノフの手が入っていると思われる」とし、さらに、無声化母音の聞き落としによって日本語訳が意味不明になったと推測される例を根拠に「ボグダーノフは標出の日本語形の表記にも関わっていた可能性がある」としている。

また、迫野虔徳（1991）も、『新スラヴ日本語辞典』について、そこにおける日本語訳の精度の低さとキリル文字による日本語表記の精密さとの落差に注目し、「ゴンザの答える日本語をボグダーノフが注意深く観察し、キリル文字で書き取る形でこの辞典は作成されたもの」とし、他のゴンザ資料に関しても「おそらく同じ様なやり方で作成されたもの」と推測している。

つまり、下記の①に示す従来の見解に対し、②のような見解が示されたわけである。

筆録者案①：ボグダーノフは監督、指導のみで、資料の筆録はゴンザが行った。

筆録者案②：ゴンザは被調査者に過ぎず、資料の筆録はボグダーノフが行った。

複数の原本に、日本人による筆録を示す明確な識語が見られる以上、①の見解が優位であることに変わりはあるまいが、本資料におけるロシア語と日本語訳との不適当な対応や、日本語の音韻体系に収まらない精密な日本語表記の実態などを重視すれば確かに②のような見方は生じうる⁶⁾。

筆跡に注目してみると、ゴンザ資料本文の筆跡と識語の筆跡は異なる。

従って、上記の筆録者案①に従えば、本文はゴンザが筆録し、識語はボグダーノフが記したと考えるのが自然であり、筆録者案②に従うならば、本文はボグダーノフが筆録し、識語はボグダーノフ以外のロシア人が記したと考えるのが自然であろう。

3. ゴンザの事跡に関する手稿

3.1 筆跡の相違と一致

ところで、ロシア科学アカデミーには、ゴンザの事跡に関する2つの手稿が存在する。「Краткая ведомость о бывшихъ здесь в Санкт Петербурге при Академии наукъ японского государства двухъ человека хъ, которые крещены в христианскую веру. Имянаимъ по крещени и первому Козма, адругому Дамиан (科学アカデミーに所属して、ここサンクトペテルブルグに滞在した二人の日本人の日本国に関する簡単な報告。両人はキリスト教信仰のため洗礼を受け、洗礼による名前は第一の者をコズマ、もう一人はダミアンという)」(以下『簡単な報告Ⅰ』とする)⁷⁾と、「Краткое известие о японцах, оные какимъ способом пр илучилися въ Российской империй (日本人たちについて、彼らがどのようにしてロシア帝国に居ることになったかに関する簡単な報告)」(以下『簡単な報告Ⅱ』とする)⁸⁾である。

『簡単な報告Ⅰ』には、漂流の経緯や日本国内の様子、地名などが記されているが、識語などはなく、誰によって、いつ記されたのかは不明である。

一方、『簡単な報告Ⅱ』は、前者とは異なる筆跡で記されており、漂流の経緯や漂着後の処遇、サンクトペテルブルグでの彼らの生活ぶりなどが詳細に記されている。そして、巻末には熟れた筆致で書かれた「Санкт

ペテルブルグの帝室科学アカデミーにて。1737 年、アンドレイ・ボグダーノフ作成」という識語がある。この識語の筆跡は、興味深いことに『簡略日本文法』の巻頭頁にある識語の筆跡と一致する。また、この『簡単な報告Ⅱ』の本文の筆跡と識語の筆跡は明らかに異なっていて、しかもこの本文の筆跡はゴンザ資料の本文の筆跡と一致する⁹⁾。

ここで筆跡について整理しよう。同一の筆跡と思われるものをまとめ、それぞれを仮に A～C とする。

- ・ゴンザ資料本文の筆跡＝『簡単な報告Ⅱ』本文の筆跡……筆跡 A
- ・ゴンザ資料識語の筆跡＝『簡単な報告Ⅱ』識語の筆跡……筆跡 B
- ・『簡単な報告Ⅰ』の筆跡……筆跡 C

ゴンザ資料の筆録者に関する従来の見解、すなわち前述の筆録者案①に従うならば、上記の筆跡 A はゴンザ、筆跡 B がボグダーノフ、筆跡 C は第三者のロシア人の手によるものと考えるのが自然であろう。また、筆録者案②に従えば、筆跡 A がボグダーノフ、筆跡 B、C は第三者のロシア人の手によるものということになる。

これらの状況を踏まえた上で、筆録者案①と②のうち、どちらの方が解釈に無理がないかということになるが、前節で述べたような不可解な点は存在するものの、やはり『簡略日本文法』や『露日単語集』『日本語会話入門』の合綴本の巻頭に「日本人によって書かれた」と明記されている事実は重視すべきで、また、ゴンザ資料や『簡単な報告Ⅱ』の識語は署名を兼ねていたであろうことを考えれば、筆跡 B の書き手はボグダーノフだと考える説、すなわち筆録者案①の解釈の方が妥当であるように思われる。

しかし、そうすると、別の新たな問題が生じるように思われる。筆跡 A がゴンザの手によるものということになれば、『簡単な報告Ⅱ』の本文の筆跡もゴンザの手によるものということになるが、それならば、そこに記されたロシア語文、それは語彙量が豊富で、複雑な構文を持つレベルの

高いロシア語の文章で、しかもかなりの長文なのであるが、それをゴンザが作成したということになる。

3.2 ゴンザのロシア語運用能力に関する評価

ゴンザのロシア語運用能力については、以前から高い評価がなされている。例えば、バルトリド（1911）は、「この天才的な青年は、当時の人の批評に拠れば、上手にロシア語で自分の意見を述べ、美事に日本語を教へたといふことである。」とし、ボンダレンコ（1999）は、「彼の言語参考書の内容、その規模、語彙グループ間の系統立った関連への造詣の深さ、彼のロシア語の書き言葉の文法の正確さ、さらにロシア語と教会スラブ語を日本語に翻訳したその資質から判断しますと、ゴンザは読み書きが出来て高い教養を持つロシア人の水準にまでロシア語と教会スラブ語を習得していたときっぱり断言することができます。」としている。

しかし、バルトリド（1911）の評価は、その内容を否定するつもりはないが、あくまでも会話における評価であり、ゴンザの語彙量や文章作成能力を保証するものではない。また、ボンダレンコ（1999）の評価も、ゴンザ資料の筆録者がゴンザであるということを前提にした上でのものなので、本稿のようにその筆録者自体を問題にしている場合には、ゴンザのロシア語能力を判断する根拠とはなり得ない。ゴンザのロシア語運用能力は、現存する資料から判定するほかないのではなかろうか。次節では、ゴンザが『簡単な報告Ⅱ』を作成できるほどの能力を持ち合わせていたのかを判断するためにその語彙量を検証してみることにする。

3.3 『簡単な報告Ⅱ』の語彙とゴンザの語彙量

『簡単な報告Ⅱ』は前述したように、ゴンザたちの漂流の経緯や漂着後の処遇などが、高度なロシア語で記されている。ここでは、そこで用いら

れている語彙と、ゴンザ資料の中で最も語彙量の多い『新スラヴ日本語辞典』のそれとを比較してみる¹⁰⁾。因みに、『簡単な報告Ⅱ』は、1737年の作成で、『新スラヴ日本語辞典』は1736年から1738年にかけて作成されているので、両者は同時期に記されたものと考えられる。

『簡単な報告Ⅱ』の文中で用いられている単語は、筆録者にとっては使用語彙であり、意味用法を熟知した単語のはずである。また、その筆跡は『新スラヴ日本語辞典』の筆跡と一致するため、両書の筆録者は同一人物のはずである。したがって、『新スラヴ日本語辞典』のロシア語の見出し語に、『簡単な報告Ⅱ』で使用されている単語があれば、その日本語訳は、単語の持つ多義性から生じる多少の齟齬はあり得るとしても、筆録者がその意味をよく理解した上で適切な訳出を行っているものと予想される。

しかし、実際には、不適当な日本語訳が付されていたり、訳出がなされず日本語部分が空欄になっていたりするものが幾つか見られる。以下、具体例の一部を挙げる。

(1) 「ВОЗМОЖНО」(『簡単な報告Ⅱ』1頁19行目)

「ВОЗМОЖНО」は「～できる」という意味を表すが、「簡単な報告Ⅱ」の使用例は直前に「не」があるので、「不可能だ。どうにもできない」という意味で用いられていると考えられる。この「ВОЗМОЖНО」は、『新スラヴ日本語辞典』の見出し語にも存在するが、これに対する日本語訳は「クツナルヨニ／きつく成るように」¹¹⁾となっている。接頭辞「ВОЗ」を持つロシア語には、「クツ／きつく」と訳されているものが複数見られるが、ここでも機械的にこの部分を訳しているように思われる。翻訳者（ここではゴンザ以外にあり得ない）がこの単語の意味用法を正しく理解していたか疑わしいのではなかろうか。

(2) 「все」(『簡単な報告Ⅱ』6頁13行目)

「все」は「すべての」という意味で、『簡単な報告Ⅱ』でもゴンザたち

の船の中のすべての物が持って行かれる場面で用いられている。一方、『新スラヴ日本語辞典』では、このロシア語に対する日本語訳は「ソシコ／其しこ」となっている。「其しこ」は薩隅方言において「それだけ」という限定的な意味であり、「все」とは反対の意味を有する。ロシア語の意味を翻訳者が理解していればこのような訳にはならないのではなかろうか。なお、「все」は6頁18行目でも使用されている。

(3) 「исправленія」(『簡単な報告』1頁20行目)

『新スラヴ日本語辞典』では、「исправленный」という形で見出し語が立てられている。この語は、「訂正した～、修正した～」という意味で、『簡単な報告Ⅱ』でもそのような意味で使用されているが、『新スラヴ日本語辞典』では、見出し語のみが存在し、対応する日本語は空欄になっている。『新スラヴ日本語辞典』のロシア語見出しを日本語に訳す際に、翻訳者が意味を理解できなかった、あるいは適当な訳語が見出せなかったロシア語が『簡単な報告Ⅱ』では、使用されたことになる。

(4) 「обычем」(『簡単な報告Ⅱ』12頁10行目)

「慣習、ならわし」を意味するこのロシア語は、『簡単な報告Ⅱ』ではソウザの埋葬の場面で用いられているが、『新スラヴ日本語辞典』では「ココロ／心」と訳されている。ロシア語の意味と訳語が対応していないと言える。

(5) 「чаяніе」(『簡単な報告Ⅱ』3頁15行目)

この語は「希望、期待」を表し、『簡単な報告Ⅱ』では、直後の「живота」と結びついて、「生きる望み」という意味で用いられていると考えられる。一方、『新スラヴ日本語辞典』にも同じ語形で見出しが立てられているが、その日本語訳は「オムコト／思うこと」としか訳されていない。訳語としてまったく不適当というわけではないが、「чаяніе」の意味を正しく理解していれば、「希望、期待」という日本語が翻訳者の語彙にな

かったとしても、「望む」「頼む」などの語を用いた訳は可能だったはずである。現に、同辞書には「изволеніе (希望)」に対して「нозомкотъ (ノゾムコト／望むこと)」、また「умоленіе (切願)」に対して「таномкотъ (タノムコト／頼むこと)」という訳がなされており、翻訳者の語彙の中に「望む」「頼む」という日本語が備わっていたことは明らかである。翻訳者は「чаяніе」というロシア語の意味を正確には理解していなかったと考えるのが自然であろう。

上記以外にも、『新スラヴ日本語辞典』の翻訳者が意味を正しく理解していたのか疑わしいにも関わらず、『簡単な報告Ⅱ』の文章中で使用されているロシア語に次のような語がある。本文中の語形で示す。括弧内は『簡単な報告Ⅱ』での使用箇所である。

видомъ (1 頁 7 行)、возимѣли (3 頁 27 行)、возможность (11 頁 14 行)、для (5 頁 13 行、6 頁 17 行、8 頁 21 行、9 頁 9 行、10 頁 34 行、11 頁 7 行、11 頁 20 行、11 頁 31 行)、жестокое (7 頁 7 行)、здравіа (3 頁 11 行)、искуство (2 頁 24 行)、матеріями (1 頁 4 行)、надежды (2 頁 10 行)、нарочитое (12 頁 17 行)、наставленія (10 頁 1 行)、превосходительству (9 頁 21 行)、приключалнся (2 頁 3 行)、приключеній (2 頁 5 行)、приключеніяхъ (9 頁 14 行)、прилучилися (1 頁 標題)、продолжался (1 頁 15 行)、случалися (2 頁 11 行)、случаю (3 頁 9 行)、смотреть (9 頁 12 行)、способомъ (2 頁 30 行)、учинены (8 頁 2 行)、осмотрѣли (4 頁 2 行)

これら以外にもおそらく存在すると思われるが、このような語の存在は、『簡単な報告Ⅱ』の本文を書いた人物と、『新スラヴ日本語辞典』のロシア語を翻訳した人物との語彙量に相当の差があったことを物語っている。そして、両書が同じ筆跡で記されているながらそのような差が見られるという

ことは、『新スラヴ日本語辞典』のロシア語を翻訳した者とそれを筆録した者が別の人物であったということを示しているように思われる。そうすると翻訳した人物はゴンザ以外にはあり得ないので、『新スラヴ日本語辞典』の筆録は、ゴンザ以外の別の者が担当したということになる。

3.4 『簡単な報告Ⅱ』の筆録者

語彙量の分析から、『簡単な報告Ⅱ』の筆録者は、『新スラヴ日本語辞典』の翻訳者、すなわちゴンザではなかった可能性が高いと思われるが、実は、これ以外にも、『簡単な報告Ⅱ』の筆録者をゴンザと考えるには不都合な点が存在する。三点挙げる。

- (1) ゴンザ資料は『友好会話手本集』『世界図絵』等の文形式の資料も、日本語の部分が逐語訳になっている。そのことと『簡単な報告Ⅱ』が自然なロシア語文で記されていることとは整合性を欠く。
- (2) ゴンザたちのことを記している文において、主語が1人称ではなく、「日本人たち（4頁6行目の「японцы」など）」、「彼ら（8頁4行目の「онѣ」など）」と表されている。つまり、第三者が客観的に描写したような記述になっている。
- (3) 11歳（漂流当時）のゴンザの回想に基づいて記されたにしては、そこに記されている内容が詳細すぎる。ゴンザとソウザが漂着直後に出会った人物の名前やその役職、また彼らが過ごした地名等が詳しく記されているが、まだロシアに漂着したばかりでロシア語も話せなかったと思われる11歳の少年にそのような理解と記憶が可能であろうか。同行者のソウザは年長者ではあったが、ロシア語の会話に難があったとされているため、固有名詞などの把握は不可能であったと考えられる。

『簡単な報告Ⅱ』の識語を記したのは、その役割からしておそらくボグダーノフで間違いのないと思われるが、語彙量の問題も含めて上記のような

特徴が存在する以上は、その本文の筆跡と識語の筆跡が異なるからといって、直ちに本文の筆録者がゴンザであるということにはならないであろう。

もっとも、上記のような問題点については、上村忠昌（2014）が「おそらくボグダーノフは、走り書きの聴取メモをゴンザに清書させたのであろう」と述べているように、ボグダーノフによる下書きの存在を想定すれば一応説明はつく。しかし、下書きは現存せず、そもそも、なぜ日本人であるゴンザに清書をさせる必要があったのかが不可解である。仮に、下書きが存在したとしても、聴取メモレベルのものから清書文を作成するには、ゴンザにかなり高度なロシア語の文章作成能力が備わっていなければならないはずであるが、前述したように、語彙量から判断する限りは『簡単な報告書Ⅱ』の本文を作成するほどの能力を彼が持ち合わせていたとは考えにくい。そのメモがある程度完成されたもので、それを単純に清書するだけであったとしても、科学アカデミーに提出するような重要な報告書の清書をロシア語学習の途上にある異国の青年にわざわざ任せることがあるのだろうか¹²⁾。

また、もしボグダーノフの下書きに従ってゴンザが書いたのであれば、『簡略日本文法』の場合と同様に、識語にそのことが示されていてもよさそうであるが、そこにはそのようなことは一言も記されていない。

『簡単な報告Ⅱ』の本文の筆録者はロシア人で、その人物がゴンザたちからの聞き取りと、ロシア側の別の記録に基づいて作成したと考えるのが自然ではないと思われる。

4. ゴンザ資料の筆跡

4.1 各資料の筆跡

ゴンザ資料の本文の筆跡を、前節では仮に筆跡 A としたが、これはあ

くまでも論が煩雑になるのを避けるためのものであり、実は適切な表示のしかたではない。というのは、ゴンザ資料のほとんどの筆跡は、これまで述べてきたように『簡単な報告Ⅱ』の本文の筆跡と同じ、すなわち筆跡 A と考えてよいものであるが、一部にそれとは異なる筆跡も見られ、その筆録には複数の人物が関わっていることが明らかだからである。『露日単語集』『日本語会話入門』『新スラヴ日本語辞典』『簡略日本文法』は、全編を通じて同じ筆跡（筆跡 A）で書かれてある。途中、印象が異なる部分も見られるが、同一人物の筆致がやや雑になったただけだと判断してよいと思われる。しかし、『友好会話手本集』と『世界図絵』については、明らかに異なる筆跡が複数箇所存在する¹³⁾。

まず、『友好会話手本集』（清書本）では、1 頁目から 108 頁の途中までは、他のゴンザ資料と同じ筆跡（筆跡 A）であるが、108 頁の「мисопонъ: како вос хошу възъ〜」の部分から最後の 149 頁までは、異なる筆跡で書かれてある。これは『簡略日本文法』の識語や『簡単な報告Ⅱ』の識語の筆跡とも異なり、また『簡単な報告Ⅰ』の筆跡とも異なるので、筆跡 D としておく。また、この『友好会話手本集』には前述したように草稿本も存在するが、こちらは全編同じ筆跡（筆跡 A）のようである。途中（通し番号 316 あたり）から、多少筆跡が異なるようにも見えるが、同じ筆録者による丁寧さの違いと判断すべきものとも思われるので、ここでは一応、全編、筆跡 A と見ておくことにする。

続いて、『世界図絵』であるが、この筆跡状況はかなり複雑である。まず、冒頭の目次こそロシア語と日本語の部分が同じ筆跡で記されているが、序文そして第 1 章からはロシア語の部分と日本語訳の部分の筆跡が異なっている。本資料は、1 頁の中に、「ロシア語本文」「本文の日本語訳」「本文中のロシア語単語」「単語の日本語訳」が左から順に配置されているが、そのうち「ロシア語本文」と「本文中のロシア語単語」は同じ筆跡で記さ

【表】『世界図絵』の筆跡変更

	ロシア語本文	本文の日本語訳	ロシア語単語	単語の日本語訳
p. 6～p. 144	B	A	B	A
p. 145～p. 155途中	B	A	A	A
p. 155途中～p. 193途中	A	A	A	A
p. 193途中～p. 193途中	A	A	A	D
p. 193途中～p. 195途中	A	A	A	A
p. 195途中～p. 196	A	A	A	D
p. 197～p. 205	A	A	A	A
p. 206～p. 207	A	A	D	A
p. 208～p. 239	A	A	A	A

れており、「本文の日本語訳」「単語の日本語訳」がまた同じ筆跡で記されているのである。そしてそのうち、前者の筆跡は前述した筆跡 B、すなわち『簡略日本文法』の識語、『簡単な報告Ⅱ』の識語の筆跡と酷似しており、後者は筆跡 A と同じものである。ただし、この形式は途中で変更され、第 100 章の途中（145 頁）からは「本文中のロシア語単語」も筆跡 A となり、途中でまた細かい変更を経て、最終的にはすべて筆跡 A で終了している。また、途中には、『友好会話手本集』（清書本）に現れた筆跡 D と酷似したものも見られる。第 1 章（6 頁）以降のこれらの変更を一覧表にしてまとめると上の【表】のようになる。表中の A、B、D は該当箇所それぞれの筆跡を前述の仮称に従って示したものである。

一見して、筆跡 A を中心としつつも、途中で変則的に筆跡が替わっていることがわかる。そして、注目すべきは「単語の日本語訳」の途中で筆跡 D が現れ、さらに「ロシア語単語」にも 2 頁分だけとはいえ同じ筆跡が見られることである。これらは何を意味するのであろうか。従来の説に従うならば、筆跡 A はゴンザ、筆跡 B がボグダーノフの手によるものと

いうことになるが、そうだとすると、この筆跡 D の存在は、「日本語訳」の筆録者が必ずしもゴンザである必要がなかったということを物語っている。そして、ロシア語の部分も B だけでなく、途中から A に替わり、さらには単語部分には D まで登場している。このことも筆録に関して役割の明確な必然性がなかったことを示しているように思われる。

それぞれの項目の執筆順序は、単語の配置や文字の偏り、筆致などから判断すると、上村忠昌（2006）が推察するように、6 頁から 144 頁までは、まず「ロシア語の本文」、続いて「本文のロシア語単語」が一気に記され、その後で「本文の日本語訳」「単語の日本語訳」が記されたものと思われる。このことから、おそらく「ロシア語の本文」は、本書作成に関して先導的な立場にある人物が執筆し、その後、作業が軌道に乗ってから別の人物に託されたのではないかと考えられる。つまり、筆跡 B は先導的な立場の人物によって、筆跡 A は従属的な立場の人物によってそれぞれ筆録されたと考えられるが、その点からは、筆跡 A がゴンザ、筆跡 B はボグダーノフの手によるものという説は好都合である。しかし、この説には、やはり次のような問題点がある。次節で詳しく述べる。

4.2 ゴンザ筆録説の問題点

ゴンザ資料全資料の筆跡は、前述のような状況であるが、本資料の筆録者はゴンザであるという従来の説はこのような状況を矛盾なく説明できるのであろうか。本資料には複数の筆跡が認められることは明らかなので、正確には本資料というより筆跡 A がゴンザの手によるものという説になるが、その説に従った場合、次のような問題点が浮かび上がってくる。

(1) ゴンザに『世界図絵』の「ロシア語の本文」を筆録することができたであろうか。『世界図絵』は、チェコの教育学者ヤン・アーモス・コメンスキーが著した世界初の絵入り教科書『Orbis Pictus』のラテン語を直

接訳したものであることが明らかになっている¹⁴⁾。ゴンザが筆録者 A であったとすれば、本資料の 155 頁以降は、ゴンザが自らラテン語をロシア語に翻訳して本文を作成したことになる。前節で述べたようにゴンザのロシア語の語彙量は高度な文章を作成するほどのものではないと思われる。そのようなロシア語でさえまだ十分でなかったはずの異国の青年にラテン語をロシア語に翻訳することができたであろうか。もし、本資料に下書きが存在し、事前にボグダーノフがラテン語からロシア語に翻訳していたということであれば、そのようなこともあり得るかもしれないが、それならば、途中から筆跡が B から A に変更していることが不可解である。本資料には今でこそ所在不明だが、もともとは清書本が存在したと考えられており、現存する本資料こそが草稿本であったと考えられる¹⁵⁾。本資料には修正箇所が多数見られることから草稿本である可能性が高い。そうすると、ゴンザが直接ラテン語をロシア語に翻訳したことになると思われるが、はたしてそのようなことが可能であったのだろうか。

(2) 『友好会話手本集』は、草稿本の段階でロシア語の部分と日本語訳の部分と同じ筆跡（筆跡 A）で記されているが、筆跡 A がゴンザの手によるものであったとすれば、彼が最初からロシア語の本文のテキストを創作したことになる。そのようなことが可能であっただろうか。やはり、ゴンザの創作というよりは本資料も『世界図絵』のように原典があったと考えた方が自然だと思われるが、ロシアでそのような資料が発見されていない以上、ロシア以外の国の書物をもとにした可能性が高い。そうすると、『世界図絵』の場合と同じくロシア語以前の翻訳の問題が生じる。

(3) 『新スラヴ日本語辞典』は、F. ポリカルポフの『スラヴ・ギリシア・ラテン三ヵ国語辞典』の教会スラヴ語、ロシア語を土台とし、それに当時のロシア語を加え、さらに日本語訳を付けたものである¹⁶⁾が、本資料には草稿本が存在せず、また、ロシア語の部分と日本語の部分の筆跡

(筆跡 A) が共通しているので、筆跡 A がゴンザの手によるものであったとすれば、彼がその見出し語の編集にも関わった可能性が高くなる。現存する本資料は、多少の下書きメモはあったにせよ、基本的にはおそらく直接的に作成されたものであろう。もし、ある程度、形式の整った草稿本が存在すれば、『友好会話手本集』等と同様に現在まで伝えられているはずであり、歴史上のどこかで何らかの記述があるはずだからである。また、ボグダーノフが口頭で指示し、ゴンザが筆録した可能性もあるが、それならば自分で編集して筆録した方が正確で効率もよいはずである。当時のロシア語だけでなく純粋な教会スラヴ語が全体の約 40% を占めていると言われる¹⁷⁾本資料の見出し語を、いくらボグダーノフの指導があったとはいえ、ゴンザが編集したとは考えにくいのではなからうか。

(4)『簡略日本文法』は、日本語の文法をロシア語の文法体系に合わせて記述したものであるが、当時のロシアでは、まだロシア語文法が確立していない。本資料にも草稿本は存在しないので、筆跡 A がゴンザの手によるものであったとすれば、1757 年にロシア初の文法書を作成したロモノーソフより 20 年も前に、ゴンザはロシア語の文法体系に則った日本語の文法書を作成したことになる。ラテン語の文法書がボグダーノフから与えられて、それを参考にした可能性は考えられるが、それでもラテン語の翻訳の問題が生じると思われる。

(5)『世界図絵』の筆跡は前節で述べたように決して一定ではない。また、『友好会話手本集』(清書本)も途中から筆跡が異なっている。このような複数の筆跡の存在は、各資料を筆録するのが、日本人ゴンザでなければならなかったという必然性を否定する。そして筆跡が 2 種類でないということは、ゴンザとボグダーノフ以外の人物も当然、筆録者の候補として浮上してくることを意味する。

5. 結論

本稿では、ゴンザ資料の筆録者を、通説通りゴンザ自身だと考えるには不可解な点が多数見られることを指摘した。それらを、簡単にまとめると次のようになる。

- (1) ギンザの筆録を示す識語が存在する一方で、ボグダーノフの筆録を示すような識語も存在する。
- (2) (先行研究で指摘されているように) 不自然な日本語訳が多く見られる一方で、その表記が非常に精密である。
- (3) ギンザ資料と同じ筆録者によって書かれたと見られる『簡単な報告書Ⅱ』は、その語彙量や記述形式、文体、内容等から判断して、ゴンザによって書かれたとは考えにくい。
- (4) ロシア語の本文、または見出し語の難易度を考慮すれば、まだロシア語の学習途上にあったゴンザにそれらの編集、執筆が可能であったとは考えにくい。
- (5) 資料全体を通して複数の筆跡が観察され、日本語訳の部分でも少なくとも2種類の筆跡が認められるため、ゴンザが筆録者である必然性が存在しない。

では、筆跡 A は、ゴンザではなく、いったい誰の手によるものなのかということになるが、これまで述べてきた不可解な点をすべて払拭して合理的な説明が可能になるのは、筆録者を、ゴンザでもなく、ボグダーノフでもない第三者のロシア人と想定する以外にはないのではないかと考える。筆跡 B は、その筆跡の分布状況、各種資料の識語の内容、またペトロワ(1965)の報告¹⁸⁾から判断して、ボグダーノフの手によるものと考えて間違いあるまい。

おそらく、ボグダーノフの身近にいた秘書あるいは教え子のような存在のロシア人が、ボグダーノフの指示に従って各種ゴンザ資料のロシア語本文や見出し語を原典から翻訳したり、選出したりして筆録し、同じくボグダーノフの指示に従ってそれらのロシア語を日本語に訳したゴンザの言葉を聞き取り、書き留めたのではなかろうか。その人物が筆跡 A の書き手であり、筆跡 D も同じような立場でボグダーノフを補佐していた人物による筆跡ではないかと考えられる。また、筆跡 C は、『簡単な報告 I』が、その内容から判断して、ゴンザたちがサンクトペテルブルグに到着して間もない頃、すなわちボグダーノフの監督下でない頃に作成されたものだと考えられるので¹⁹⁾、科学アカデミーの書記官か誰かであろうと推察する。

各資料に見られるロシア語の綴りのいくつかの誤記が、ボグダーノフの筆録でないことの根拠、また、ゴンザが筆録したことの根拠に挙げられることもある²⁰⁾が、ロシア語を執筆したのがボグダーノフ以外のロシア人であれば、誤記の可能性も多少高くなるのではなかろうか。

また、3.2 で触れたようにロシアではゴンザのロシア語能力が高く評価されているが、そのような高い評価こそがかえって、本資料の筆録者がロシア人であったという解釈を補強するように思われる。

最後に、冒頭で挙げた『簡略日本文法』の識語について考えてみる。本稿の結論は、この識語の内容と矛盾することになるからである。とはいえ、『簡略日本文法』の識語と、『新スラヴ日本語辞典』『簡単な報告 II』の識語では、本文が同じ筆跡であるにも関わらず、前者はゴンザの筆録を語り、後者はボグダーノフの筆録を語るという明らかな矛盾を表しているので、識語それぞれの内容に真実性を期待すること自体が無理なのかもしれない。しかし、ボグダーノフがなぜ「アンドレイ・ボグダーノフのロシア語教育と監督の下、日本人によって書かれた。」との識語を残したのかは考える必要があろう。これは憶測に過ぎないが、そこには当時のボグダーノフが置

かれていた立場が影響しているものと思われる。ボグダーノフは、ゴンザ資料の作成当時、アカデミーの職員として務めてはいたが、待遇面では決して恵まれていなかったと言われている²¹⁾。漂流民ゴンザの件に関して彼が元老院から求められていた仕事は、「監督」と「教育」であった。そのことをよく示す『帝室科学アカデミー歴史資料 3』の 126（1736 年 6 月 25 日付け）の記述を引用しよう²²⁾。

「……元老院令と公文書の効力に従い、以下のことを命ずる。日本人たちと彼らに付けられた兵士の子供たちは給養のためアンドレイ・ボグダーノフに引き渡される。ボグダーノフは自分の下で彼らを養育し、日本人たちにはロシア語の読み書きを、上述の兵士の子供たちは日本語を学習するが、その際日本人たちはロシア語の読み書きを、兵士の子供たちは日本語を熱心に勤勉に学ぼう監督しなければならない。学習のためにロシア語とその他の言語の書籍が必要であれば、それに関してはボグダーノフがアカデミー事務局に上申書を提出すること。厚かましい言動、余分な娯楽、わがままは許してはならず、彼らを畏怖させておくこと。（以下略）」

ボグダーノフが、帝室科学アカデミーに最も誇示したかったことは、日本人たちの監督と彼らへのロシア語教育が成功していること、すなわち、与えられた職務を彼が忠実に果たしていることだったのではなかろうか。

注

- 1) コブレutz（1958）によると「これらの教科書（ゴンザ資料…引用者注）をボグダーノフのものだとする最初の記述は、N・I・ノヴィコフの事典の中に見られる。（中略）この見解は、19、20 世紀の大多数の百科事典や伝記事典に引き継がれた」とのことである。なお、翻訳文は奥水則子（2013）に拠った。
- 2) バルトリド（1911）については外務省調査部（1937）、ベルグ（1924）については小場有米（1942）、ドストエフスキー（1930）については網屋善行（1998）の翻訳文にそれぞれ拠った。
- 3) ペトロワ（1965）、アルパートフ（1988）、ボンダレンコ（1999）参照。村山七郎（1965、1971）

も同様の見方をしている。一方、ゲオルギエフ（1969）やクリコワ（1979）は、アンドレイ・ボグダーノフとゴンザの共著としつつも、筆録者については明言していない。なお、ペトロワ（1965）は江上修代（1997）、アルバートフ（1988）は下瀬川慧子・山下万里子・堤正典（1992）、クリコワ（1979）は長沼庄司・江上修代（1997）にそれぞれ拠った。

- 4) 本研究では、ロシア科学アカデミー所蔵の原本、ならびに鹿児島県立図書館所蔵の複製本を利用した。原本閲覧に際しては、ボボワ所長はじめ、多くの研究員の方々に様々な便宜をはかっていただいた。記して感謝申し上げる。
- 5) ゴンザよりも前にサントペテルブルグに滞在していた漂流民は既に亡くなっており、また、ゴンザとともに漂着したソウザは、1736年9月に亡くなっているため、『簡略日本文法』が作成された1738年の時点では日本人はゴンザしか当地に存在しなかった。
- 6) 本稿の筆者は、駒走（1995）において、ゴンザが11歳で日本を離れたために日本語の語彙量に限界があったこと、また、ロシアで初めて書記法を獲得したのであれば精密な音声表記もなし得た可能性があること等を理由に、②の見解への支持を保留した。また、江口泰生（2006）は、「原拠とこれを訳したロシア語とのずれ、このロシア語と更にこれを訳した日本語とのずれ、日本人 informant の語彙力の問題、こうした問題を含んだ日本語訳への我々の主観的評価、などが関わる以上、日本語訳から音写者（筆録者…引用者注）を推定する方法は、あくまで想像の域を脱しえないのではないか」としている。
- 7) 元ロシア科学アカデミー研究員ゴレグリヤード氏より複写物をご恵与いただいた。記して感謝申し上げる。
- 8) 種子田幸廣氏、上村忠昌氏より複写物をご恵与いただいた。両氏に感謝申し上げる。
- 9) 上村忠昌（2014）によると、ゴンザ研究会では、詳細な筆跡鑑定の結果、『簡単な報告Ⅱ』の本文の筆跡がゴンザの手になるものだという判定に至ったとのことである。ゴンザの手になるものかどうかはともかく、その筆跡がゴンザ資料の筆跡と一致するという判断は本稿の筆者の見解と一致する。
- 10) 『新スラヴ日本語辞典』の日本語訳には、ロシア語の見出し語と意味的に対応していない例や、異なる見出し語に同一の訳語が当てられている例などが存在するが、それでも11,580語のロシア語見出しと、その訳出に用いられた2,813語（異なり語数）の日本語が記載されており、当時のロシア語の単語とゴンザの語彙量を知るには有益な資料である。駒走昭二（2003, 2004）参照。
- 11) ゴンザ資料の日本語訳は、すべてキリル文字で記されているが、ここでは便宜上、「キリル文字の片仮名転写／漢字仮名交じり表記」の形式で示すことにする。
- 12) 文章作成能力を養うには、日常の言語生活だけでなく、ある程度体系化された教育が必要だと考えられるが、ペトロワ（1965）によると、ゴンザがロシア語を教育機関で学び始めたのは

1735 年だったとのことである。ゴンザ資料を作成し始める、わずか 1 年前そして、『簡単な報告 II』が作成された年の 2 年前のことである。

- 13) 筆跡の途中変更に関しては、江口泰生・米重文樹（1998）、上村忠昌（2006）にも指摘がある。
- 14) ペトロワ（1965）、江上修代（1997）参照。
- 15) ペトロワ（1965）には、本資料が 2 部存在することが明記されており、分類番号まで記載されている。本稿の筆者が 2015 年 9 月にロシア科学アカデミー東洋写本研究所を訪問した際には、その所在を確認できなかった。また、ゴンザ資料全体の分類番号も整理し直されており、その存在自体が認知できない状態になっていた。
- 16) 村山七郎（1985）参照。
- 17) ボングレンコ（1999）参照。
- 18) ペトロワ（1965）には、「ボグダーノフの肉筆は、我々がソ連邦科学アカデミーの古文書保管所にある彼のほかの筆跡や、イー・エヌ・コブレツの論文の中で公表されているものとも照合して正確につきとめている」との報告がある。翻訳文は、江上修代（1997）に拠る。
- 19) クリコワ（1979）、長沼庄司・江上修代（1997）参照。
- 20) ボングレンコ（1999）は、『新スラヴ日本語辞典』に見られる綴りの間違いを多数指摘し、これらの間違いを「外国人であるゴンザにはありえることですが、後に科学アカデミー図書館の古文書保管係兼副館長となったボグダーノフにはありえないことです」としている。
- 21) コブレツ（1958）には、ボグダーノフがアカデミーの役人たちから庶民出身の図書館「一般職員」として生涯軽視されていたこと、他の官吏や職員と比べて著しく薄給であったこと、給料の支払いが滞納されていたこと、彼が老後の暮らしに不安を抱いていたこと、彼の死後、妻が生前の夫の勤務に対して正当な評価とそれに見合う報酬を求めて嘆願書を提出したが却下されたこと等が紹介されている。興水則子（2013）参照。
- 22) 翻訳文は江上修代（1997）に拠る。

引用文献

- 網屋善行（1998）「ロシアにおける最初の日本人とペテルブルグ日本語学校〔論文「ロシアの太平洋への進出と日本との最初の接触」第 2 章から〕」（会報『ゴンザ』29 号）
- 江上修代（1997）「18 世紀前半のロシアにおける日本語」（会報『ゴンザ』20 号）
- 江口泰生・米重文樹（1998）『友好会話手本集』（鹿児島県立図書館）
- 江口泰生（2006）『ロシア資料による日本語研究』（和泉書院）
- 外務省調査部（1937）『ウェ・バルトリド著 欧州殊に露西亜における東洋研究史』
- 上村忠昌（2006）『漂流青年ゴンザの著作と言語に関する総合的研究』（私家版）
- 上村忠昌（2014）『薩摩漂流船とゴンザ』（南日本新聞開発センター）

- 興水則子 (2013) 「〈翻訳〉A・I・ボグダーノフの出自：その生涯と仕事 I・N・コブレantz」(『むうざ』第28号)
- 小場有米 (1942) 『カムチャツカ発見とベーリング探検』(龍吟社)
- 駒走昭二 (1995) 「ロシア資料と方言史研究」(『名古屋大学国語国文学』77号)
- 駒走昭二 (2003) 「『新スラヴ・日本語辞典』の日本語訳」(『名古屋大学国語国文学』92号)
- 駒走昭二 (2004) 「『新スラヴ・日本語辞典』の語彙」(『語彙研究の課題』和泉書院)
- 迫野虔徳 (1991) 「『新スラヴ・日本語辞典』の「オ」の表記」(『辞書・外国資料による日本語研究』和泉書院)
- 下瀬川慧子・山下万里子・堤正典 (1992) 『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』(東海大学出版会)
- 田尻英三 (1981) 「18世紀前半の薩隅方言」(『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学篇』32巻)
- 長沼庄司・江上修代 (1997) 「ロシアにおける日本語研究の起源」(会報『ゴンザ』18号)
- 村山七郎 (1965) 『漂流民の言語』(吉川弘文館)
- 村山七郎 (1971) 「新スラヴ・日本語辞典における18世紀初めの薩摩方言語彙」(『文学研究』68集 九州大学文学部)
- 村山七郎 (1985) 『新スラヴ・日本語辞典 日本版』(ナウカ)
- 八杉貞利 (1909) 「十八世紀に於ける露西亞の東洋語研究」(『東洋時報』127号)
- アルバートフ (1988) Владимир Михайлович Алпатов, Изучение японского языка в России и СССР
- クリコワ (1979) А. М. Кулкова, Начало изучения Японского языка в России, Народы Азии и Африки. 1971, No. 1
- ゲオルギエフ (1969) 「日本語を学ぶロシア人—18世紀のペテルブルグ日本語学校—」(『今日のソ連邦』ソ連邦大使館、日本語版)
- コブレantz (1958) Андрей Иванович Богданов 1692-1766 Москва
- ドストエフスキー (1930) M. Dostojewsky, Rußlands Vordringen zum Stillen Ozean und Seine erste Berührung mit Japan. Japanisch-Deutsche Zeitschrift, Neue Folge 2. 1930, Hft. 4-6.
- バルトリド (1911) В. Баргольд, История изучения Востока в Европе и России, издание, 2-ое, Ленинград
- ペトロワ (1965) О. П. Петрова, Японский язык в России в первой половине XVIII в. (по архивным материалам), Народы Азии и Африки. 1965, No. 1
- ベルグ (1924) Lev Semenovitch Berg, Otkrytie Kamchatki i ekspeditsii Beringa 1725-1742
- ボンダレンコ (1999) 「ゴンザのロシア語について」(会報『ゴンザ』30号)
- 『帝室科学アカデミー歴史資料3』Материалы для истории императорской Академіи наукъ. томъ третій (1736-1738) Санктпетербургъ 1886

付記

日高昭二先生には公私にわたり、たいへんお世話になりました。日高先生、そして先生との出会いに心から感謝します。